

早稲田大学における学術的文章作成授業 —2年目における成果と課題—¹

佐渡島 紗織²
早稲田大学

An Academic-Writing Course for Freshmen Students at Waseda University

Saori SADOSHIMA
Waseda University

本実践報告は、早稲田大学基盤教育の一環として2008年度より開講されている「学術的文章の作成—早稲田生のための基礎講座—」授業の内容と運営を報告するものである。合わせて、3学期間、開講してきた成果と課題を記す。本授業は、これまでに2156人が履修した。学生が大学で提出を求められる文章を作成する際に必要な文章技能を指導することを目的とする。書くことと思考することが一体であること、学術的文章を書かせることによって学問をする姿勢が身につくことを強調した初年次向けの授業である。全8回、各回約60分間、1単位の科目である。筆者が授業内容を作成し、学内オープン教育センター、遠隔教育センター、留学センターとともに指導と運営を担当している。本授業には、二つの特徴がある。(1)パソコン配信によって多数の履修者に同一の内容を伝える。(2)大学院生を指導員として育成し、指導員に学部生を指導させて個別指導を行う。指導員は、履修者の提出する文章を毎週受け取り、コメントと評価点をつけて各履修者に返送する。履修者と指導員は、すべてのやりとりをパソコン上で行う。これら二つの特徴を持つ授業である。指導員は、週に一度のミーティングで授業担当者と会い、課題内容や評価基準の確認を行なう。打ち合わされた内容をもとに各自が自宅パソコンで指導を行なう。指導員は、筆者と他2名の教員が研修を行い養成している。学部履修者の満足度は高い。また指導員の文章作成能力が向上するという副次的な成果がみられる。しかし、指導の質を維持しながら履修者数を増やしていくことには課題もある。大学全入時代となり大学院進学率が上がっている日本において、大学院生が学部生を指導するプログラムは今後ますます有益となるであろう。

〔キーワード：文章作成，学術的文章，オンデマンド，個別指導，大学院生指導員，大学院生養成，早稲田大学〕

1. 授業の背景と概要

本稿は、2008年4月に開講された授業、早稲田大学オープン教育センター科目「学術的文章の作成—早稲田生のための基礎講座—」の指導内容と運営方法を報告するものである。あわせて、3期目を終えた現在見られる成果と今後の課題を記すものである。

¹ 本授業の開設と運営は、早稲田大学オープン教育センター、遠隔教育センター、並びに留学センターの職員方の尽力に拠るところが大きい。ここに厚く謝意を表したい。また、指導員養成に多大な貢献をしている吉野亜矢子専任講師と太田裕子助教に厚く御礼申し上げる。また献身的な指導を行った延べ72人の指導員に心より御礼申し上げる。

² 早稲田大学留学センター sadoshima@waseda.jp

日本の大学において、日本語母語話者を対象とした学術的文章作成の初年次教育を行なうところは増えつつある。しかし、文章作成指導はフィードバックに手間がかかるため、どのようにすれば質の高い授業を多くの学生に提供できるかが共通の悩みである。京都精華大学（京都精華大学教育推進センター、2009）では、「チューター」が文章フィードバックを行い、「日本語リテラシー」と名づけられた必修の導入教育を行なっている。週3コマで15週にわたる授業を2レベル開講している。授業は、少人数での対面方式であり、比較的小規模の大学での導入教育としては理想的な形である。早稲田大学の向後ら（向後他、2006）は、推薦で大学入学が決まった高校生400人余りをフル・オンデマンド形式で受講させ、毎週提出させた文章を数名の「コーチ」がフィードバックした。課題提出者が週を追うごとに減ったものの、指導者によるコメントが有益であったと学生が評価している。大島（2005）は、東京水産大学（現東京海洋大学）でピア・レスポンスを取り入れた授業を行い、協働的な作業を通して学生が文章を批判的に検討する力をつけたと報告している。

本報告実践は、京都精華大学や向後らのように大学院生が指導に参加し、より多くの学生にきめ細かな指導を提供しようとする取り組みである。ただし、入学者1万人対象を目指すという規模の中で個別フィードバックを行なう実践は、他に類を見ないものである。

本授業は、次のような経緯で開設された。早稲田大学は、2007年10月21日に創立125周年を迎えた。その機に大学は、次期125年の教育方針として「基盤教育の充実」を発表した。そして、基盤教育の三本柱として《口語英語》、《文章作成》、《数学》の能力育成を宣言した。これらは合わせて「アカデミック・リテラシー」と呼ばれている。また、早稲田大学1年生の総数が約1万人であることから、通称「1万人シリーズ」とも呼ばれるようになった。《文章作成》能力向上を目指して新しく設置された科目が本授業である。

「学術的文章の作成—早稲田生のための基礎講座—」は、学術的な文章を書くにあたって必要な基礎的な技能を教える科目である。どの学部に入學した学生も履修可能なオープン教育センターに設置されている。学期中8週にわたって開講され、1単位が付与される。特徴は大きく二つある。一つは、学生が一度も教室に集まらないフル・オンデマンド形式をとることにより履修者全員に同一の授業内容を提供する点である。筆者が、パワーポイント画面と音声による授業内容を作成した。二つ目の特徴は、個別指導を行う点である。担当教員が大学院生を研修し、大学院生が教員の監督のもとで学部生を指導するという二重構造の指導が行なわれている。学部生が毎週提出する文章を大学院生が一編ずつ読み、コメントと評価点をつけて個別に返却する。要するに、本授業はオンデマンド形式と個別指導により、多くの受講生を対象としながら質の高い指導を提供することを目指している。

これまでの規模は次の通りである。履修した学生は、2008年春学期は537人、同秋学期は676人、2009年春学期は925人、3学期合計で2156人である。学生の指導に当たった者は、2008年春学期16人、同秋学期22人、2009年春学期34人で、延べ72人であった。

2. 指導内容

(1) 授業の目的

授業の目的、「学術的な文章を書くために身につけておくべきよい技能を学ぶための講座」（講義要項から抜粋）の背景には、二つの指導目標が意識されている。《書くことによって思考を鍛える》と《学問をする姿勢を作る》である。《書くことによって思考を鍛える》は

言語論的転回の考え方を基にした目標である。単に頭にある考えを言葉に翻訳して表現することが文章作成なのではなく、文章作成という行為を通して思考そのものを行っているのだという考え方である。また、《学問をする姿勢を作る》ために、「学問とは、先人たちが築いてきた知識をふまえて新しい発見をすることである。」という前提を強調し、引用の目的や方法、参考文献の記述法などを時間をかけて取り上げている。

授業画面は、早稲田大学が運営する遠隔システムを使って配信される。履修者は、自宅や大学のパソコンで授業を視聴する。全8回で各回約60分間である。

授業画面に登場するのは、黒板に見立てたパワーポイント画面とアニメーションによる教員（筆者）と学生四人である。文章作成の授業では例文を批判的に検討することが大切である。また、教員が答えを示し続けるという形を避けるためにもこの学生役を作った。アニメの学生たちは、いわゆる「揺さぶり」をかける役目として登場し、意見を言ったり、間違えたり、互いの考えを批判し合ったりして、随所でディスカッションを展開する。

(2) 授業の日程と各週の内容

授業は、各学期の第2週から10週まで開講される。毎週、新しい講義がコンピュータで配信され、400から500字の文章を一週間以内に提出させる。研修を受けた指導員(後に詳述)は、課題締め切り日から一週間以内にコメントと評価点を書き入れた文章を履修者に送り返す。これを8週間繰り返す。最後の1週は、授業の配信はなく、それまでに書いて提出した文章のうちの1編を書き直して提出する(2009春学期より実施)。

8回の講義内容は以下の通りである。この講義内容は、筆者が早稲田大学大学院(アジア太平洋研究科とオープン教育センター科目)において6年にわたって実践した内容(佐渡島, 2005)を学部生向けに作り直したものである(佐渡島・吉野, 2008)。

【第1回 学術的な文章とは】

授業ガイダンスの後、ことばと思考の関係について学ぶ。ことばの使い方を鍛えることによって思考が鍛えられるということを確認する。そして、学術的な文章が他の文章と異なり、先行する研究をふまえて新しい見解を書いて示す文章であることを伝える。具体的な技能として次のような要素を例文を批判しながら学ぶ。書きことばで書く。一字下げをした段落を作る。日本語文章の記号を使う。「と思う」などを排し考えた中身だけを書く。文末は「である。」とする。体言止めを避ける。自分を「筆者」または「私」と呼び、書いている文章を「本稿」または「本論文」と呼ぶ。箇条書きをする際には中黒は使わず記号や番号を振る。これらの点に留意した400字の文章を書く課題が出される。

【第2回 文を整える】

「文」を思考の単位と考えて積み上げて書くことを学ぶ。その結果、思考が整理され、読者に分かりやすく、書き直しの容易な文章となる。「一文多義」の文や「ねじれた文」を修正しながら学ぶ。例えば、主旨を先に述べ修飾部分を別の文で述べる。あるいは、まず主張と別の文で理由を述べるようにする。「一文一義」の次には、文と文の関係を自覚できるようにする。接続表現を積極的に使い、文と文との関係を明確にしていく練習を行う。「一文一義」と「接続表現をできるだけ用いる」を意識して文章を書く課題が出される。

【第3回 語句を明確に使う】

語が何をどこまで指し示すかという認識は人によって異なることを学ぶ。これにより、語句の意味範囲を自覚して使うことが大切であり、読み手にもその意味範囲が厳密に伝わ

るように書くことが大切であることを学ぶ。意味範囲が重複している語を同じ文の中で使わない、複数の意味を含蓄する助詞の「の」を避ける、指示代名詞を置き換える、年号や量は特定する、「～化」「～的」「～性」を特定する、などの練習を行う。また、不要に多用されている外来語を和語・漢語に置き換える練習や専門用語を説明する練習を行う。

【第4回 全体を構成する】

学術的な文章は一般に＜序論・本文・結論＞という構成であることを知る。そして＜序論・本論・結論＞は、文章を三つに区分したものではなく、同じ内容を反復していることを学ぶ。論述全体の目的は種々あることを学ぶ。例えば、「問題点を指摘する」、「観察した結果を報告する」、「原因を追究する」、「問題を指摘した上で対応策を提案する」などがある。序論で目的を明確に伝え、結論では目的が果たされたかどうかを報告する。つまり、序論と結論は呼応するように書く必要があることを学ぶ。この回の課題では、ある話題について論述の目的を考え、＜序論・本文・結論＞の構成で文章を書く。

【第5回 論点を整理する】

論述における本論をどのように整理するかを学ぶ。論点の整理には二つの側面、すなわち、内容を均質に分けるという側面と抽象度を構成するという側面があることを知る。抽象度に着目して構成する米国の作文技法「パワー・ライティング」を練習する。語、文、段落を「123231」などと、数字で抽象度を表しながら全体の構成を示す。

【第6回 参考文献を記す】

第6回からの三回は、参考文献と引用を扱う。第6回では、参考文献を引用をすることにどのような意義があるのかを考える。(1)証拠を挙げることになる。(2)文献の内容を概括したことばで述べると筆者の解釈が入ってしまうため、もとのことばを読者と共有できる。(3)自分の論と他者の論とを区別できる。次に、参考文献表の作り方を練習する。APA書式(American Psychological Association)を日本語に応用した書式で、著書、訳本、論文、新聞記事、雑誌記事、インターネットサイト、映画、などを挙げる練習を行う。

【第7回 引用をする1】

本文での引用の仕方、特に＜ブロック引用＞の方法を学ぶ。本文において参考文献を引用する場合にはどのような場合があるかをまず考える。例えば、自分の論を支持する記述を出す、自分の論と対抗する論を打ち消す、具体例を引く、具体例を一般化する、別の視点を示すなど、いろいろある。次に、実際の書き方を学ぶ。＜ブロック引用＞は、参考文献の記述を塊で引く技法で、予告、引用、分析を行う。この週の課題では参考文献が示され、その文献をブロック引用しながら500字で論じることが課される。

【第8回 引用をする2】

前半で＜キーワード引用＞、後半で「読者への案内」を学ぶ。＜キーワード引用＞は、参考文献を要約するときに必要な技法で、ここでは著者年方式で出典を示す方法を学ぶ。後半の「読者への案内」は、題名のつけ方とパラグラフ・ライティングの練習である。パラグラフ・ライティングは、段落を思考の単位とした米国の文章作成法で段落の第一文に段落の統括文を置くことにより読者を案内する。文献を使った500字の主張文を書かせる。

以上8回の授業が遠隔システムで配信される。授業内容は学期中何回でも視聴できる。各回で課される文章課題のテーマは、学期ごとに変えた。

(3) 指導員による個別指導 [資料1] 参照

各指導員が指導する履修者は「クラス」として固定し、指導員の希望で定員(15~70人)を決定した。履修者同士の直接交流はなく、指導員と履修者が個々にやり取りをする。[資料1]の中の「コメント欄」は、履修者が指導者に向けて書いた、自分の文章や過去のコメントに対する言及である。指導員は、授業前の挨拶文と課題未提出者へ個別メールを送付した。なお、遠隔プログラムはパスワードで入るため「なりすまし」は行いにくい。

(4) 指導における留意点

コメントをつける際に留意した点は、どこまで修正案を示すかということである。文章指導では、「添削」をしてしまうと修正をしているのは添削者であるため書き手の力が伸びないと言われている。しかし逆に、問題点の指摘だけでは修正ができない書き手もいる。そこで、次の方針をとった。(ア)書き手の文章力が高いと判断される場合には、問題点の指摘にとどめてよい。「この語は曖昧で、実際に何がしたいのかが読み取れません。」など。(イ)書き手の文章力がまああると判断される場合は、修正のヒントを与えるようにする。「ここでは接続表現が使えるのではないのでしょうか。」など。(ウ)書き手の文章力があまりないと判断される場合は、修正案を示す。「第2文は、『~』と書いた方が分かりやすいですね。」など。その場合は、できれば修正案を複数示して書き手が選択できるようにする。このように打ち合わせて、書き手の主体的なかかわりを促すようにした。

文章の内容にどこまで言及するかもミーティングで打ち合わせた。主な評価点が「書き方」に対して与えられるため、内容に関するコメントは記述して示すようにした。

(5) 模範文章

毎週、提出された課題文章の中からよく書けているものを指導員が選び、履修者全員が見ることのできる掲示板に無記名で掲示した。選ばれた者には指導員がその旨報告した。模範文章は授業担当者が予め点検して評価の基準に大きな差がないことを確かめた。

(6) 学生からの質問

質問を、内容によって、授業担当者、指導員、システム管理者が回答し、掲示板で公開した。「主張を前の方で示す場合は、本文だけでなく序論にも主張を書くのですか。」「ある人に直接話をきいてその内容を引用したい場合は、どのような表記をすれば良いのでしょうか。」などの質問があった。システムに関する質問も多く出された。

3. 指導員のミーティングと管理

指導員は、週に一度集まり評価に関する60分のミーティングを行った。このミーティングでは、その週の授業内容と課題を確認しながら、提出された文章にコメントをつける練習を行った。最初の2学期間は配点も話し合っただけだったが、3学期目よりは授業者が予め配点を決定して伝達する形となった。このミーティングは、指導員数が増えた2009年よりは週に4回開かれ、それぞれの回には個別の指導員が座長を務めた。そして座長を務める指導員が週に一度集まって授業者と打ち合わせを行うという二重の体勢となった。

また、筆者と他の教員一名(太田祐子 留学生センター助教、2009年より授業担当者)が、毎週、20枚程度のコメント付き課題文章を点検し、指導員によるフィードバック内容を確認した。優れている点や不十分な点を指導員にメールで個別に伝えた。

4. 指導員の育成と身分

2009年春学期現在、指導員は、学内の博士後期課程と修士課程在籍者と若干名の修学生により構成されている。所属研究科は10（法学、文学、政治、経済、社会、公共経営、アジア太平洋、日本語教育、人間科学、教育）に及ぶ。

指導員は、オープン教育大学院生科目「学術的文章の作成とその指導」授業（毎学期開講、15週2単位）で育成している。2009年度現在3人の教員（佐渡島、太田、吉野亜矢子教育学術専任講師）がほぼ同一の内容でこの授業を担当している。ただし、この授業を履修すれば自動的に指導員になれるのではなく、授業担当者が文章力と指導力を審査したうえで採用している。指導員は、2008年秋学期より早稲田大学が独自に設定した、大学プログラムに携わる大学院生のための身分（時給2000円）を持つ。

5. 授業の運営組織

オープン教育センターが、授業登録、履修者のクラス分け、成績発表、単位付与を担当した。遠隔教育センターが、授業画面の作成、音声の吹き込み、システムの管理、質問対応を行なった。留学センターが、指導員の募集周知、指導員の雇用管理を行った。

6. 学生による授業評価

2008年秋学期学生評価(回答率19.9%)では、「この授業は役に立ちましたか。」という評価項目に対して、「非常に役に立った。」(63%)と「まあまあ役に立った。」(32%)が合計95%であった。また、「学術的な文章を書く力がついたらと実感できましたか。」という項目に対して、「たいへん実感できた。」が21%、「まあまあ実感できた。」が65%で合計87%であった。パソコン上での授業評価はより意識の高い学生が回答する傾向がいなめないが、満足度は大方高かったのではないと言える。

自由記述の評価では、次のようなものがあつた。「普段のレポートでは内容は評価されるけれど文章については評価されないの、文章自体を評価するこの授業は新鮮で有意義でした。」、「毎回の授業内容を踏まえて課題を提出したことで文章を書く力がついたらと思います。課題のフィードバックには毎回わくわくしていました。」。

ただし、システム上での記録によれば、8週にわたって一度も視聴しなかった学生も毎学期おり、オンデマンド授業としての課題が残った。

7. 本授業の成果と今後の課題

(1) 学術的な文章の作成を正規科目で指導することの意義

早稲田大学ではほぼ全学部で卒業論文の提出が卒業条件である。しかし、論文の書き方を正規授業で教えている学部はほとんどない。三年間レポートを書いている、あるいは、ゼミ指導教官に学べば卒業論文は書けるようになるという考えが一般的である。しかし、そのレポートの書き方を教える授業もないのが現状である。また、本学では数年前より各学部で剽窃を防ぐための規則が教授会の議題にのぼっている。インターネット情報をコピーして出典を示さずに本文に挿入する学生が後を絶たないからである。しかし、学生が提出する文章を見ていると、どう書くと剽窃になるか、どう書くことが適切なのかを理解していない学生が多い。学術的な文章が他とどのように異なり、なぜ知的な所有権を有す

る文章なのかという、根本の事情が教えられていないのである。こうした現状をふまえると、基礎科目として学術的文章の書き方を指導することは歓迎すべきことであろう。

(2) オンデマンドで文章作成授業を行なうことの限界と対策

文章作成能力の育成を一方通行であるパソコン配信で行って効果が上がるのか懸念された。しかし、4人の学生役アニメを登場させて授業で「揺さぶり」をかけた点と、大学院生指導員による個別指導を取り入れた点によって、懸念は相当解消されたのではないかと感じている。文章作成能力は書かせなくては育たないという方針を貫いて、毎回文章を書かせたことも、履修者の満足度や伸びの実感につながったようである。今後は、追跡調査を行い、レポートや卒業論文において履修生が技能をどう活用し、学業成果に結びつけていったかを科学的に分析する計画である。

(3) 二重構造の指導体制で授業を行うことの意義と課題

当授業は、初年次教育プログラムとして始められたが、大学院生の能力向上に大きく貢献していると推測される。毎学期末に行なっている、筆者と指導員との個別面談では、指導員が揃って「自分の勉強になりました。」と述べる。毎週、特定の観点から多くの文章を批判的に見る作業を繰り返すうちに、文章を診断する力が飛躍的に伸びるという。

しかし、研修を終えたばかりの指導員のコメントを点検すると、問題を含むものもないわけではない。評価基準や約束事を打ち合わせたうえでの作業であっても、やはり文章指導には「さじ加減」があり、有効な指導ができるようになるためには経験が必要である。修士生である指導員はこの「さじ加減」が分かるようになった頃に卒業し新しい指導員と交代する。常に指導の質を維持する方法をシステム化することが今後の課題である。

履修希望者が多く、指導員の育成が間に合わないことも今後の課題である。抽選もれとなった学生が、各学期約400人、100人、200人と出た。指導の質を維持しながらも、履修枠を増やしていけるよう、指導員育成授業の充実をはかっていきたい。

大学全入時代となり、しかも大学院進学率が上昇している日本において、大学院生が学部生を指導するプログラムの開発は有益であり、今後ますます求められていくであろう。

参考文献

- 大島弥生 (2005) 「大学初年次の言語表現科目における協働の可能性—チーム・ティーチングとピア・レスポンスを取り入れたコースの試み」『大学教育学会誌』, 27 (1), 158-165
- 京都精華大学教育推進センター (2009) 「日本語リテラシー教育部門」
(<http://cetl.kyoto-seika.ac.jp/literacy/>) (2009年9月10日閲覧)
- 向後千春・伊豆原久美子・中井あづみ・加藤亜紀・井合真海子・藤岡緑 (2006) 「eラーニングによる教育教育大学入学前『文章表現』の設計・実践とその評価」『日本教育工学会研究報告集』, JSET06-3, 79-86
- 佐渡島紗織 (2005) 「早稲田大学大学院アジア太平洋研究科における『アカデミック・ライティング』授業—『書くこと』の総仕上げ—」『早稲田大学国語教育研究』, 25, 55-65
- 佐渡島紗織・吉野亜矢子 (2008) 『これから研究を書くひとのガイドブック—ライティングへの挑戦 15週—』ひつじ書房

【資料1】指導員によるフィードバック例

【第4回】

高校生のアルバイト
—高校生が本当にやるべきこと—

○○ ○○

「はつきり言って」は高校生が中学生でアルバイトを行う必要があるが、
十分に必要経験を得ておく。また、高校生が本当にやるべきことに
絞るべきである。

「はつきり言って」高校生がアルバイトをする必要はないであろう。
しかし、アルバイトからではしか得られない社会経験があるという声
も多い。たとえば、時間厳守の概念である。雇われれば高校生は社
会における時間の厳しさを体験から学ぶことができる。他には言葉
遣いや礼儀等である。しかし、これらは全部、真面目に高校生活
を送れば身につくものである。高校では部活動等の課外活動もある。
それに、体育祭や文化祭は生徒が中心となって企画をしていく。それら
が一生懸命取り組むことにより、十分な社会経験を積むことが
できる。それに、アルバイトは高校を卒業してからもすることが
できる。高校生の間は高校生としてやるべきことを一生懸命やるだけ
でいいであろう。

以上のことから、高校生がアルバイトをする必要はないと言える
であろう。高校生活は高校生活を十分に満喫すべきである。

コメント欄

自分の結論が世間とは反対の高校生はアルバイトをする必要がない
というインパクトの強いものなので、結論を本論の最初に持ってき
て強調するようにした。結論の内容から、後々序論の内容を変形させ、
文字数を調節した。前回に引き続き、語尾と一文一義と接続後
も意識した。

評価のポイントと評価点 指導員(## ##)

- 評価ポイントと評価点は、以下のとおりです。
- 3/3点 ①序論で文章の目的を明確にする
 - 2/3点 ②序論で述べた、文章の目的を本論で達成させる
 - 3/3点 ③序論と結論が呼応するようにする
 - 1/1点 ④形式を整えて書く(第1回参照)
 - 1/1点 ⑤一文一義で書く(第2回参照)
 - 1/1点 自分が特に注意を払った点またはコメントに対する感想をコメント欄に書く

「序論・本論・結論」という構成の仕方が、よく理解されています。
第3回までの学習項目も、よく押さえられていると思います。
「はつきり言って」という表現は、学術的文章には合わない表現
なので、避けたほうがよいでしょう。
(12 点中 11 点)

コメント [YM1]: 目的が明確に示されて
います。「はつきり」が口癖使われていま
すが、どちらも不要ではないでしょうか。

コメント [YM2]: 「はつきり」は話し言葉
的な表現なので、避けたほうがよいでし
ょう。なぜ「必要はない」と言えるのか
も、説明しなければ、わかりません。

コメント [YM3]: 「本」の語句ではないで
すか。

コメント [YM4]: 「本当にやるべきこと
について」の「追究」に対する答えが「や
るべきことを一生懸命やるだけでいい」
というのでは、少しずれていくように思
います。結論の段落にある「高校生活を
十分に満喫すべき」が、本当の結論なら、
本論でも述べておく必要があるでしょう。
(-1)

コメント [YM5]: 「高校生活を十分に満喫
する」という言葉は、本論にないのに、
何をすることを指すのか、よくわかりま
せん。結論は、本論で述べたことを繰り返
す形で、目的(問い)に対する答えを
まとめましょう。